

成城学校中国人留学生史へのアプローチ

陳 力 衛

1. はじめに

中国や台湾へ学会出張すると、名刺交換を済ませてから、向こうからよく「ああ、あの成城ですね」と驚きの声が聞こえてくる。中国近代史を多少知っている人ならば極自然な反応であるが、彼らがイメージしている「成城」は、もちろん明治十八年(1885)に創立した、都内の牛込原町にある「成城学校」のことである。明治三十一年(1898)に中国人留学生をいち早く受け入れた成城学校は、中国近代史上錚々たる人物を輩出させたところとして中国で広く知られているからである。

そういう場面に出くわすと、「実は……」と説明しようと思っても、話が長くなり、また昔はたしかに同じ根っこで、そこから生えた枝だったからまんざら関係のないことでもないのに、いずれ詳しく説明しようと思うようになった。そこで、四五年前に成城学園の百周年(2017)を迎えるいろいろな行事が動き出したとき、自分は「成城と近代中国」という特研を申請し、関係資料の収集と中国人留学生の調査などを始めた。しかし手元にある『成城学園九十年史』を調べてみても、あの昔の成城学校にはなにも触れていなかったし、どこか意図的にそちらとの関連を断ち切ろうとする感じさえ受けた。なぜだろうか。この点においては現代中国のように、どこもかしこも、何が何でも昔に遡ってより長く自分の歴史を関係付けようとするやり方とは随分違うのである。

まず、『成城学校百年』(1985)に記載されている成城学校の設立と沿革

を時間軸にそって簡単に紹介しよう。明治十七年末(1884)に西南戦争に参加した退役軍曹の日高藤吉郎によって京橋区築地に設立された「文武講習館」に始まり、翌年麴町に移転したのち、九月に生徒350人の学校となった。明治十九年(1886)一月に校舎も牛込区市谷加賀町に移り、四月に第二代校長には陸軍大尉の柳生房義が就任した。それはわずか三か月間のピンチヒッターで、七月には原田一道陸軍少将が第三代校長となり、九月に成城学校と改名された。『詩経・大雅』にある「哲夫成城(哲夫以て城を成す)」に因んだものである。翌明治二十年(1887)に陸軍幼年学校条例の発布があり、二年後の明治二十二年(1889)陸軍少将の川上操六が第四代校長となる。歩兵幼年科・青年科コースを設置し、陸軍に委託された士官アカデミーの予備教育を実施するようになった。富国強兵が叫ばれる明治時代において、一私立の学校校長に陸軍の少将クラスの人が就くという特異性が出てくる。それだけでなく、公爵や皇族の取り入れにも積極的であった。明治二十年、嘉仁親王(後大正天皇)殿下が成城学校を参観されるのをきっかけに、明治二十一年に三条実美を名誉補助員にしたことで、立て続け皇族の四親王をも同じ処遇にした。明治二十三年(1890)に皇族久邇宮邦彦王(後昭和皇后之父)が成城学校幼年科に入学されることから、宮内省から毎年成城学校へ2,400円が下賜され、大正九年(1920)まで30年間も続いた。

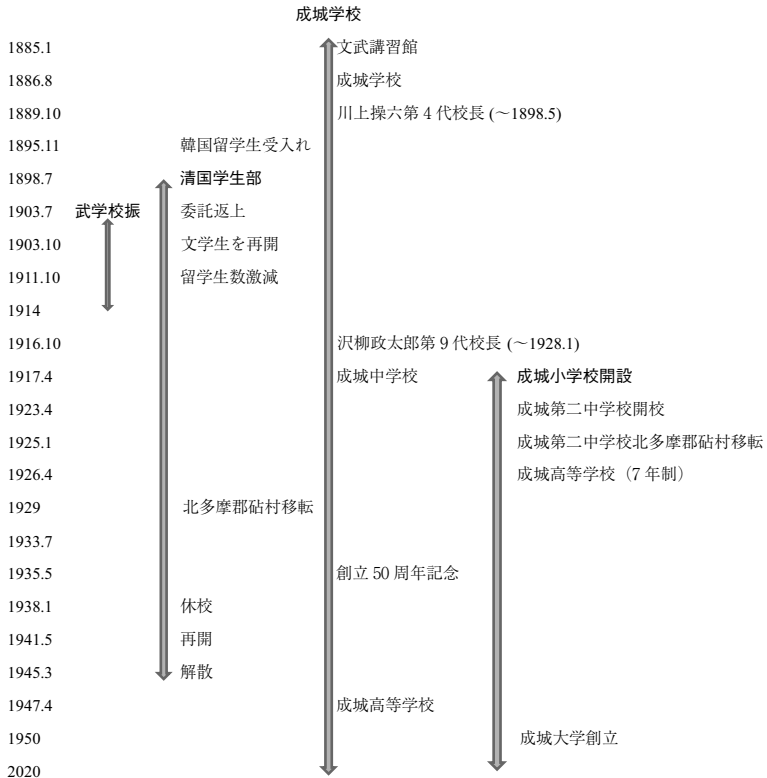
一方、第四代校長川上操六の主導で明治二十九年(1896)に韓国の学生を受け入れ留学生教育をスタートした。二年後の1898年7月に清国留学生部を開設した。同年文部省の認定を得て、成城学校は完全なる普通中学校となったのである。大正五年(1916)にかつて文部省最高官僚だった柳沢正太郎が第九代校長に就任してから、大規模な改革を開始し、その教育理念に基づき、翌年に成城小学校を開校し、大正十二年(1923)に男女共学の成城第二中学校を開校し、卒業を迎える小学生を受け入れた。関東大震災の後、規模が拡大するにつれて、士官予備学校としての成城学校の性

成城学校中国人留学生史へのアプローチ

格と相反する中、成城第二中学校は大正十四年(1925)北多摩郡砧村(現世田谷区成城)に移転し、翌年に七年制の成城高等学校が創設開校された。やがて成城学校本校を離れ、大正十五年(1926)財団法人成城学園の設立が許可された。そして旧制「成城高等学校」を経て昭和二十五年(1950)に成城大学が設立された。図1で示すと次のようである。

つまり、今の成城学園は自分のルーツを沢柳先生が牛込区原町成城学校内に設立した成城小学校に求めている。意識的にそれまでの成城学校との関係性を断ち切ろうとしているように見受けられる。たしかに成城学校も

図1 沿革史略図



沢柳政太郎校長が亡くなられた翌年(1928)に沢柳色の一掃を始めたらしい。『成城学校八十年』(『成城学校百年』に再録)には次のような記述があった。

沢柳校長は、自由主義的教育思想の持主で、それを学校教育に採用する努力を払って教育界に新生面を開いた人物であり、氏のこの動き自体は大正時代に顕著なデモクラシーの動きと無関係なものではなかった。沢柳校長が新教育思想を実験しようと努めた附属小学校は、伝統的な成城学校教育に背反する性格を持っていたため、(昭和)三年一月二十六日の決議で成城第二中学校財団(後の成城学園)に移管することに決定した。この決議は、沢柳色との事実上の決別を意味するものであった。同年四月十六日に附属小学校の廃止が認可され、ここに小学校は完全に分離し、沢柳精神は成城学校から払拭されて成城学園に受け継がれることになったのである。

こういう複雑な経緯を一々説明してもなかなか分かってもらい難く、中国人の関心は上記の図の左側にある成城学校に附属した留学生部の歴史にあり、そしてそこから分れた振武学校にも向いている。両者はいずれも過去の歴史となったが、上記のように成城学校の発展には陸軍がかかわってくることで、加えて沢柳政太郎校長が文部省をはじめ多くの政府部門と密接な関係を保っていること、さらに留学生部の設置により毎年外務省へ補助金の申請をする関係上、日本駐在中国公使館も含めていろいろな公的機関と密接にかかわっていることが挙げられる。結果的に宮内省、陸軍省、文部省、外務省との交渉が多いため、成城は一私立学校でありながら、多くの関係資料が公文書として保存されている。今日では、国立公文書館アジア歴史資料センターのホームページで公開され、利用されやすくなっている(本稿に示された資料番号は全て当センターのものを指す)。

本稿はその意味でこうした資料公開に負うところが大きく、成城学校や中国人留学生に関する多くの誤った情報がネット上で流れる現在、これ

を機に、再度振り返って整理してみる必要があるかと思う次第である。

2. 近代中国人留学生を受け入れる先駆け

近代中国の中国人日本留学史について言えば、成城学校は必然的に話題にのぼるものだ。上記のように清朝末期の1898年に早くも中国人留学生の受け入れが開始されただけでなく、他の国を含めて外国人留学生の教育も半世紀近く続いたことから、実藤恵秀の著書『中国人日本留学史』（1970）においても成城学校が「留学生教育において最古、最長の学校」として評価されている。

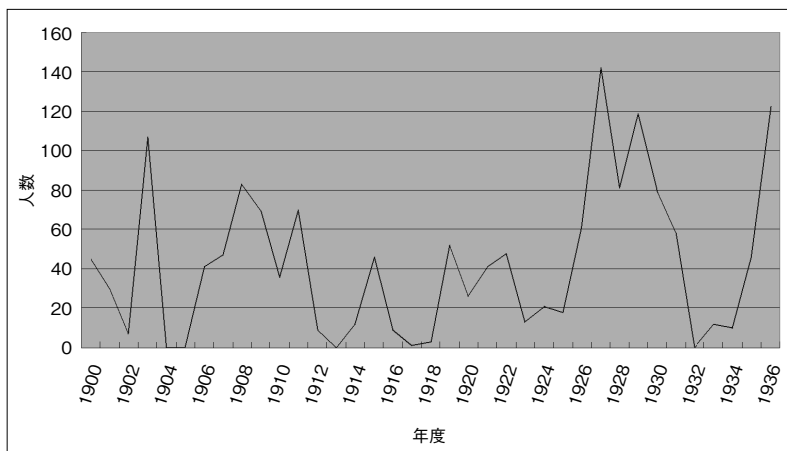
成城学校自身の関係資料（たとえば、昭和十年十二月五日「成城学校留学生現状報告」）によると、昭和十年（1935）三月までに、1,387人の卒業生がいた。しかも「国務総理¹⁾、陸軍総長3、総督1、陸軍次長1、農商務次長1、参謀総長1、督軍1、都督1、巡撫1、長江上游司令1、外交次長1、軍長1、司法総長1、大学総長3、地方法院長1、主計処長2、銀行総理2、紡績会社社長1」と、国務総理から紡績会社の社長などに至るまで社会的に高位に位置する多くの卒業生を輩出した実績を報告している。

さらに、昭和十二年（1937）六月十八日の外務省文化事業部宛の「成城学校留学生部助成金下附申請ノ件」によれば、「明治二十八年留学生教育ヲ開始シテヨリ四十餘年、来学者ハ支那、朝鮮、満州、暹羅、フィリピン各国ニ及び其数五千名ニ達シ卒業生一千五百餘名ニ上リ候」と、在籍者としての「来学者」が中国のほか、朝鮮、満州、タイ、フィリピンを入れてなんと5,000名にも達し、「卒業生」も1,500余名になり、大量な留学生へ教育を施したことが業績として挙げられている。

1) 賈德耀(1880-1940)、字昆庭、安徽合肥の出身、中華民国の著名政治家。1903年6月成城学校を出る。1919年8月、保定陸軍軍官学校校長となり、新式の軍隊に寄与している。中將として11月陸軍総長を任じる。1926年2月15日暫く国務総理を兼ねる。1926年3月4日国務総理となる。4月20日総理を辞任する。1940年逝去。

たしかに前年までの昭和十一年二月二十日に発行した成城学校留学生部編集の『留学生部出身者名簿』によれば、中国人の修業・卒業者、在学者数を合わせて1,564名を得ることができる²⁾。それらを年ごとに並べて以下の図2としてグラフに作り直してみた。このグラフはかつての在籍者の実情を反映させていないため、留学生史の実態に迫るには不十分なところもあろうが、明治三十三年七月から昭和十一年一月までの修業・卒業・在学者数の推移に上げ下げは激しく、六つの大きな谷を経ている。まさに激動の近代日中関係を反映させる晴雨表とも言えよう。

図2 成城学校中国人留学生の年度ごとの推移



成城学校における50年近くの留学生教育史を上記のグラフに基づいて時間的・空間的に五期に分けることができる。

第一期 (1898-1903) 将軍名士を輩出

第二期 (1903-1919) 振武学校と文武の分担

第三期 (1919-1930) 規模拡大

2) むろん、朝鮮からの39人とタイからの4人を除く。

第四期 (1930-1937) 盛から衰へ

第五期 (1938-1945) 終焉をむかえる

つまり、成城学校の留学生史の全体像からみると、近代中国で活躍した卒業生が前半の第一期、第二期に集中し、著名人も多く輩出していたため、関連の研究が進んでいるのに対して、第三期を含め後半の第四期以降についてはほとんど触れられていないのが現状である。空間的に見れば、前半の明治三十一年 (1898) から昭和四年 (1929) までの牛込原町時代と、後半の第四期の千歳村 (祖師谷) 移転後の時代及び第五期の終焉を迎える時代とに二分することも可能であろう。

事実、その留学生部の名前も「清国学生部⇒中華留学生部⇒留学生部」へと、時代の変化とともに変わってきている。最初は「私立成城学校清国学生部」のもとで運営されるが、1912年の辛亥革命以降、中華民国に変わってからは「中華留学生部」と通称するようになり、1932年に満州国が成立されてから、留学生の国別としては満州、蒙古も入ってきたし、昭和十年 (1935) からタイやジャワからの留学生も来ているので、「中華」の二文字をとって昭和十一年六月一日から単に「成城学校留学生部」と称するようになった。

本稿では留学生部の前半について簡単に振り返ることに止め、おもに千歳村 (祖師谷) 移転後の後半について眺めてみたい。なぜなら、今までの研究ではほとんどその部分に触れていないし、さらに現在の成城学園の隣に位置しながら、その歴史的存在と関連性すらあまり知られていないためである。

2.1 第一期 (1898-1903) 将軍名士を輩出

そもそも成城学校留学生部の設立の背景について、『成城学校沿革史稿』に触れた箇所を下記のように引用しておく。

明治二十七、八年戦役にその弱体を暴露せる清国は、従来悠々たる

大国の反発力を警戒して侵略の機会を窺へる歐洲列強の好餌となり遂に支那分割論さへ提唱される形勢となれり。ここに於いて清國識者の間には国力恢復の急務を論ずる声頻に起り且その恢復策として我が明治維新に倣い旧弊を打破し以って政治改革を遂げんとする変法自強の説亦行はるるに至れり。此の時に当り参謀次長にして本校校長たる川上操六氏は戦後に於ける日支関係の一日も忽にすべからざるを察し、清國の開港には一にその青年子弟の新教育を施にあるとなし、之を彼地の官紳に謀りたるに概ねこの議に賛せり。これがために参謀本部には清國留学生管理委員設置され、本校はこの管理委員の委託によりその留学生教育を行ふことになれり。之れ本校留学生部の起源にして、我国における清國留学生教育の嚆矢たり。

これはもちろん建前の一つであるが、本当の狙いは中国に近代軍人を育て、そこで一つの前線陣地となつて、歐洲列強から日本をまもるための緩衝地帯を作つておく戦略的な策の一つであつた。従来その創立に陸軍の働きかけがクローズアップされてきたが、最近はその当時の中国駐在日公使の矢野龍溪の役割をも研究の対象としている。

初めての中国人留学生を迎えた年に、前もつて学校の視察に来た姚錫光が帰國後中国語による『日本学校述略』(1898)を出版し、そこに「成城学校」について「士官学校予科のために設立されたものであり、1,020人の在學生があり、授業内容は中学校と同じく、体操、兵操も重視する。五年制でさらに高等科一年間を経て陸軍学校へ入学可能。」という紹介がある。実際に、第一期において参謀本部の委託という形で成城学校で清國留学生への軍人養成のための予備教育を施しているの、「最初入学せし四名に就いての一年間に授けたる科目及程度なるも、その後の入學者に就きても亦同様なるべし」としている。同年の『東京遊學案内・中篇』(少年園, 1898)にも、「四十四名の教員を以て、九百二十九名の生徒を養成し、兼て二十名の韓国留学生、五名の清國留学生を教養せり」と、人数のずれが

見られるものの、韓国の留学生 20 名と清国留学生 5 名を教育しているのがわかる。

大正十三年「財団法人成城学校中華留学生部沿革並事業概略」には有名な卒業生として、蔡鏐 (1882-1916)、呉禄貞、良弼、陸錦、張紹曾、徐樹錚、呉光新、唐在礼、蔣百里 (1882-1938)、劉存厚、張孝準 (1881-1925) などの優秀な将軍の名前が挙がる他、江庸、任傳榜、李士偉、錢稻孫 (1887-1966)、周家彦、程光明、呉玉章 (1878-1966) など政治家、実務家として朝野に活躍していたことが記されている。

軍事の近代化を目指す近代中国においてこういった卒業生は清末の袁世凱に利用されたり、民国の北洋政府に軍の統帥として登用されたりして近代中国の陸軍を形作っていった。ゆえに、中国留学生史に関しては、やはりこの第一期の卒業生についての華々しい記録が多く、いまでも研究の中心テーマとなっている。

第一期において成城学校の留学生減少の最初の谷は 1900 年の義和団運動への八国連軍（日本を含む）の弾圧によるもので、黄福慶 (1975) の研究では 1902 年に 7 名までに減少したことがわかる。しかし、留学生の評判とともに成城学校の人気上がるにつれて、すぐに留学に来る中国人が増えてきた。1903 年 7 月になって成城学校はその増加に耐え切れず、委託制度を返上し学生募集を停止してしまった。そのため、参謀本部は中国人のために新設された振武学校に、唐繼堯 (1883-1927)、李烈鈞 (1882-1946)、閻錫山 (1883-1960) などの武学生をすべて成城学校から移すこととなった。

2.2 第二期 (1903-1919) 振武学校との文武分け

2.2.1 振武学校 (1903-1914) の新設

前述したように成城学校の留学生委託制度返上により、参謀本部は清国との合意の上、振武学校をあらたに開設した。清国側の窓口は日本駐在の汪大燮であったため、留学生関連の事は一応清国側にも回報することにな

っていた。中国ではよく蒋介石も成城の出とされることが多かったが、1907年に日本に来た蔣氏が入ったのはすでに成城から分れた振武学校であった。

1905年当時の振武学校の在學生はやはり湖北、湖南、雲南の出身者が多く、中でも湖北出身者が最も多かった。全体では官費284人、私費73人、合わせて357人で、官費が圧倒的に多いのが特徴である。加えて、入学者数でも成城学校よりずっと多くの學生を確保している。

振武学校は開学から十年ほど続いたのち、1914年に閉校した。原因は1911年前後の清国国内の情勢によるものである。一つは清朝廷が辛亥革命前に王朝維持のために學生の速やかな帰国を要求したこと。もう一つは辛亥革命が起ってから、學生が積極的に帰国し、革命に参加したことである。蒋介石(1887-1975)、張群(1889-1990)等26名の中国留學生の退学退隊が後者に起因するものであり、その影響が大きかった。陸軍省はこうした事態に対して、「清国陸軍學生退学及退隊ノ件通牒」(1911. 11. 8)を出している。曰く、

目下我陸軍ニ於テ教育シタル清国將校學生及同生徒ハ其本国於ケル事局ノ影響ヲ受ケ炮工学校、士官学校、經理学校及野炮兵第十九聯隊ニ於テ修業中ノ者合計二十六名販国ノ目的ヲ以テ逃亡シ特ニ士官学校ニ於ケル残余ノ生徒モ種々ナル口実ヲ設ケテ販国ヲ切望シ之レカ在校ヲ強ユルトキハ前者ト同一ノ行動ニ出ツルヤモ計リ難キ狀況ニ……。斯ノ如キ行動ハ軍紀嚴肅ヲ要スル我陸軍ニ於テハ最モ嫌忌スル所ニ有之。假ヘ清国人ト雖モ我カ陸軍部内ニ在ル間ハ之ヲ輕々ニ看過スルコト能ハサルヲ以テ在士官学校清国生徒ニ対シテハ全部退校ヲ命シ又左記逃亡者ニ対シテモ退校若ハ退隊ノ處分致候。……此旨可然清国公使ヘ御回示相成度候也。

この通牒に挙げている処分の対象は史久光、曾繼梧、楊鴻昌、張群、蔣志清、陳星樞の6人で、そのうちの「蔣志清」はほかならぬ蒋介石であつ

た。

この退学の動きは全国に広がり、成城学校にも影響を及ぼしている。1912年中華民国が成立されてからも振武学校はしばらく残務処理のため継続していたが、1914年に閉校した。委託武学生は再び成城学校の担当となった。

2.2.2 文科を学ぶ成城学校

第二期の成城学校留学生部は振武学校の開校と十年ほど重なるが、1903年10月に清国公使館の要請を受けて文学生向けの教育を再開している。1905年6月に留学生人数が204人に達したが、年末の留学生取締規則の発布により在日留学生の抗議活動が盛んになり帰国運動も起こった結果、在学者数の激減をもたらした。前記図2のグラフにおける二回目の底がそれである。翌年になってまた急激に276名に回復したが、辛亥革命の1911年には第三回目の減少を迎えることになり、留学生の退学者が78名に至って、翌1912年には在学生在が僅か1名しかいない事態となる。翌1913年の卒業生数が底についたのはそのためである。その動きは先に見た振武学校の退学などと同じである。同年10月には留学生修業年限が二年と改められ、在学者数は157名までに回復してきたが、1915年12月に日本が中国に二十一ヶ条を突き付けた問題で、中国国内での抗日運動が高まり、翌1916年は3名の入学者しかなく、在校生を合わせても4名となった。これが四度目の減少である。1918年になっても全部合わせても37名の在学生在しかなかった。

第二期は三度の大きな波に揉まれていたものの、成城学校側では留学生用の日本語学習教科書の編集などに多くの努力を払っていた。たとえば、1903年には『日文教程』第一編～第四編（成城学校、1903）を出し、1906年には版を重ねるだけでなく、中国語による『日語用法彙編』（成城学校教師編、清国留学生会館、1906）も出版していた。

2.3 第三期(1919-1930)規模拡大

大正八年(1919)十二月,望月軍四郎の寄付により,新校舎,体育館などが竣工され,一層設備の面で整った。翌大正九年十月の『成城学校概観』では,

大正八年二月望月軍四郎氏より中華民国留学生の教育に資する趣旨を以て金五拾萬円の寄附を受く同年八月陸軍省より隣接地千七百坪を借り受けて敷地の拡張を謀り同年九月より改築の工事に着手し大正九年九月新校舎竣工せり

とある。中華民国留学生部についても,

彼此内外多事時に隆替変遷ありしと雖も本校の教育方針は儼として渝らず其親切なる教育と周到なる管理とは幸に相当の効果を奏し畢業者六百八十三名中文武両途に於て彬々たる人材輩出し現在重要なる地位を占むる者頗る多し

と、歴史を振り返りながら、現状では、

今や大に其規模の拡張を図り校舎並に寄宿舎を新築し別に体育館を設け又近く日華倶楽部を新築して以て両国人士親善の根本培養に資せんとす特に中華民国留学生の修学上先づ主要とする所の日語日文学習に対して適當の教科書に乏しきは一般の遺憾とする所なり本校は多年の経験に依り日語日文の教科書を編成して其学習に便せり而して目下在学の学生は高等普通科一百名委託武学生二十六名なりと雖も尚入学を希望するもの日に校門に集る故に近々更に寄宿舎を増設して其収容力を増大せんことを期す

とあるように、寄宿舎や体育館を拡充し引き続き教科書編纂につとめていることが記されている。

ただ、同じ年に「中国では五・四運動が起こり、日本排斥のうねりが高まった。そのために留学生の増加は望めなかった」ようであった³⁾。そのため、中国語のチラシを作って海外公館を通して学生募集に力を入れるこ

とになった。

大正十一年(1922)三月の中国語による「成城学校中華民国留学生修肄業梗概」という沢柳政太郎校長名入りのチラシには、卒業生は「其数已越七百」となっているが、開講内容は「三か月ごとに新しいクラスを開き二年内に下記の科目「日語、日文、英語、算術、代数、幾何、三角、地理、歴史、博物、化学、物理、体操」を修了し高等専門学校への入学の準備となる」ものとある。

中国語によるチラシはむろん、留学生を募集する際に中国国内の人向けにも使えるように用意されたものであろう。事実、外務省を通して在外公館に広く協力を要請する外交文書が多く残っているし、同時に在外公館を通して「推薦」された関係者の入学(いわゆるコネ入学)も多々あったことから、こうしたネットワークが留学生部の学生募集や規模拡大などに寄与し、毎年の補助金申請にも役立ったと思われる。

しかし、翌年(1923)の関東大震災でまた留学生の帰国が増えて五度目の減少となった。グラフで見た二三年の低迷はそれを物語っている。二年後の大正十四年(1925)に在学者数がまた急上昇していく。

「大正十四年十一月留学生名簿」(3-2543, 0204-0206)によれば、その年の在学者数は119名にも達している。奉天からの学生が49名、吉林の3人を入れれば半数近くになり、しかも奉天留学生49人中、官費生が43人で圧倒的多数を占めるのが特徴と言えよう。東三省での権益拡大を目論む日本とも協力関係を取り付けた張作霖の親日ぶりを反映していたものであろうが、遑って1904年の日露戦争時、張はロシア側のスパイとして活動し、日本軍に捕縛されたが、成城学校第七代校長だった児玉源太郎(時の陸軍参謀次長)の計らいで処刑を免れたことも関係しているかもしれない。

その後、昭和に入り、在学者数は安定的な増加により、1927年には卒

3) 『成城学校百年』86頁

業生が142名に達しピークを迎える。1927年には蒋介石の南京政府の樹立後、留学生の人材がさらに必要とされたことから、1928年4月から留学生部規則を改訂し、高等軍政科、高等日語専修科及び預科の三科に分けることとなった。留学生のための陸軍士官学校の予備教育を成城学校で引き続き担うことになり、入学者数も徐々に増え始めていった。

そして、関東大震災のあと、もともとの原町の校舎が手狭となり、規模拡大のためもっと広い土地を求めて郊外への移転が始まった。

3. 第四期(1930-1937) 盛から衰へ

3.1 成城学園の隣に移転

大正十四年(1925)に真っ先に成城第二中学校が東京市外の砧村に移転してきた。それに続いていまの成城学園の隣に移転してきたのは留学生部だった。

実藤恵秀の「中国人日本留学史稿(十)」(『日華学報』70号、昭和13年10月1日)によれば、「大震災の結果として多くの学校が郊外へ郊外へと移転したが、成城学校も牛込原町から市外砧村に移り一大成城学園を形成した。そこで同校留学生部も、昭和四年二月、大寄宿舎先づ成り、翌五年七月には校舎も立派に竣工した(図3写真参照)のである。いづれも鉄筋コンクリート永久的の設備である。」とある。

この校舎正面の写真を見ると、左下に線路が見えるから、線路をはさんだ側から撮ったものであろう。そして線路に近いこともわかる。

実際に、昭和十年五月発行の『成城学校創立五十周年記念』をめくってみると、学校要覧とともに、多くの写真も載っていたが、その中に「成城学校留学生部敷地配置図」(図4)というのがある。むろん牛込の原町ではなく、上の写真と同じくいまの成城学園のすぐ隣に留学生部は位置していた。

その配置図をあらためて眺めると、やや左よりの縦の太い黒線は仙川で、

成城学校中国人留学生史へのアプローチ

図3 成城学校中華留学生部

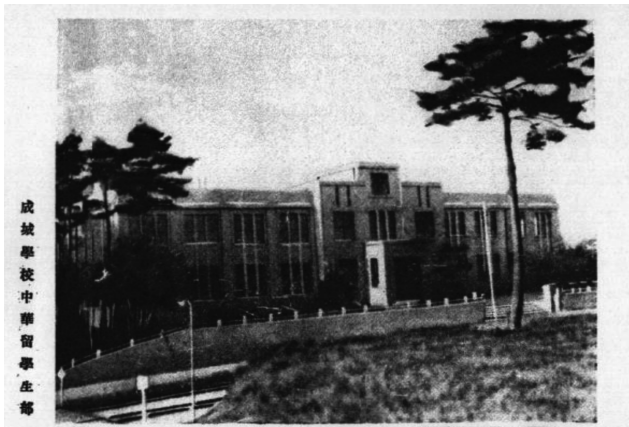


図4 成城学校留学生部敷地配置図



上のドーナツ形を呈しているのはいまの成城池であろう。一番下に小田急の線路があって右方向は新宿と示してあるから、留学生部には新宿寄りの上の写真に映されたメインの校舎（線路に近いほう）と奥の寄宿舎があり、広々とした中庭もあったようである。さらに仙川との間に運動場もあり、

広大な敷地だったことがわかる。

その図 4 の配置図にある仙川の左側の「乗馬練習場」に、いまの成城大学七号館が立っている。その四階から右へのアングルで確認すると、一番手前の木々が生い茂っているところは仙川で、民家が立て込んでいるところは運動場で、奥の二棟の大型マンションは当時の留学生部だったのであろう。

昭和四年二月、先に出来た成城学校中華留学生部寄宿舍の落成を記念するハガキが発行され、そこには下記のように詳細な情報が記されていた。

位置	東京府北多摩郡千歳村祖師谷字下祖師谷一二二七
敷地	面積三三二五坪二合八勺 (但 将来校舎建築用地共)
運動場面積	四〇一七坪五合八勺
総建坪	三九〇坪九合三勺一寸
総延坪	六八七坪四合五勺二寸 (本屋鉄筋コンクリート造附属家木造)
建物階数	総二階建一部三階及地階
設備	電灯、電力、電話、蒸気暖房、衛生、給水、給湯、家具等
工期	昭和三年五月起工、翌四年二月竣工
工事費総額	約拾七万円
収容人員	百〇五名

立派な設備を整えた 105 人を収容できる大宿舎が出来上がっている。

続いて、昭和五年に図 3 のような本校舎も完成した。これから留学生教育を大いに発展させようと、だれもが期待を膨らませているところへ、歴史が動いたのである。

3.2 最後の栄光

翌昭和六年 (1931) 九月十八日に満州事変が勃発した。留学生がほとんど帰国してしまったため、前年引っ越してきたばかりの新しい宿舎には 1 名の留学生しか残っていなかった。しかたなくしばらく閉鎖するほかはな

かった。これが六度目の谷であった。翌昭和七年三月に「成城学校ハ明治三十一年中国留学生ヲ收容シテ以来三十有餘年間ニ亘リ四千有餘名ノ卒業生ヲ出シ」といつものように業績を並べつつ補助金申請に苦心した⁴⁾。

しかし、時はすでに日本軍国主義時代に突入し、日本の関東軍により満洲全土が占領されると、同昭和七年(1932)に満洲国が建国された。昭和九年(1934)から満洲留学生を「中華」と区別して「国」として受け入れ始める。そして昭和十年に「中華または満州」以外の学生が入学してきた。あわせて南洋からも留学生の入学があった。意外なことに昭和十年十月から夜間部も原町に開設し、市内という環境からか平日の六時から八時まで「日語」の初級班程度を開講している。かれこれしているうちに、昭和十一年(1936)を迎え、また入学者数がうなぎ上りになってきた。

その前年の昭和十年三月発行の中国語版「成城学校留学生部要覧」をみると、初級班・中級班・上級班・陸軍士官学校受験班・専攻班という五つのコースが設けられている。初級班は日本語のみで、中級班と上級班はさらに修身・数学・理化・英語・地歴を加えている。この三つのコースは四月、九月、一月の年三回の募集で三か月か四か月の修学期間とした。一方の陸軍士官学校受験班は日本語のほかに修身・数学・理化・軍事学・教練を中心に教え、九月だけの募集で七か月の修学期間が設けられていた。最後の専攻班は今でいう予備校的な性格で随時入学可能となっていた、という内容である。

具体的に留学生部の当時の状況として昭和十一年三月五日時点の学生の内訳を見てみよう。

- 一、 昨年四月ヨリ本年三月マデノ入学者数
男 117 名、女 5 名、計 122 名、内官費生男 1 名
- 二、 国籍別

4) 成城学校中華学生部ノ経費臨時補助ニ関スル高裁案(H-0415, 0009)による。

中華民國 91 名, 滿州国 31 名, 計 122 名

三, 現在数 昭和十一年三月五日現在

在籍学生 85 名, 在寄宿舎生 66 名

四, 学生入学時ノ学力

本国ニ於テ受ケタル教育程度

大学卒業 14 名

専門学校卒業 15 名

中等学校卒業 85 名

其他 8 名

計 122 名

内日本ニ於テ日本語ヲ学ビシ者 18 名, 本国ニ於テ日本語ヲ学ビシ者 5 名

五, 入学時の志望学校名

陸軍士官学校 40 名

農業大学 6 名

飛行学校 2 名

工業大学 14 名

帝国大学 4 名

滿州中央訓練所 7 名

医学校 4 名

高等商業学校 3 名

警察学校 2 名

鉄道教習所 2 名

法科専門 1 名

高等学校 4 名

文理科大学 3 名

早稲田大学 3 名

である。

そして、その名簿の「例言」の説明によると、

昭和十二年六月一日現在日本各級学校在籍の中華民国及び満州国学生総数は5,945にして昨年度5,909に比し約40名の増加なりとあるように、この年の六月までに日本に来ている留学生の人数が新たなピークに達したことがわかる。

ただ、その直後に事態が急転直下、日中全面戦争となり留学生が大挙帰国することになった。

然るに本年七月上旬盧溝橋事件八月上海戦一終に日支事変となりし為め未曾有の大激減を来すに至れり。即ち暑假前迄中華約4,000の学生は九月上旬には約600余名に減じ、十月二十日現在では留日中華学生実数は少数新来及再渡来を加へ約300名と推定さるゝに至り。六月現在6,000名本名簿は既に歴史的記録となれり

という挽回のできない事態となったものであった。さらにわざわざ「中華民国駐日留学生監督処は十月八日に閉鎖し監督陳次溥氏は十日離京帰国」と付け加えたほどの深刻さであった。

したがって、1937年7月7日、中国の北京近郊で起きた盧溝橋事変は日中の全面戦争をもたらしたことで、すべてが変わってしまい、留学生数が今度は谷に落ちたまま、ついに這い上がってくることはできなかった。

3.3 留学生の特徴

3.3.1 父子同校

中国では科举制度が廃止された1905年から留学というものが新たな出世の道となったため、一家挙げての来日や、夫婦揃っての留学や、あるいは兄弟一緒にやってくるなど、さまざまな形で日本に留学してくるようになった。成城学校に関しては、第一期または第二期の卒業生の活躍ぶりが喧伝されるなか、第三期以降になると、かれらの子供が父に勧められたま

ま同じところへやってくるケースが多くなった。

たとえば、第二期の振武学校生、唐繼堯(1883-1927)は民国の護国軍司令官を務め、後に雲南省省長にもなった人物だが、大正十二年三月「唐紹驥及唐紹武ノ士官学校聴講希望ノ件」という在外領事から外務省宛の電文をみると、二人の息子がその時士官学校予科に在学中で引き続き聴講を希望しているということがわかる。

また、呉光新(北京政府陸軍総長、成城学校明治三十六年六月卒)は陸軍大将にもなった人で、昭和四年九月訪日の際、外務省の書類では要人往来として扱い、その子息、呉必昌、呉必達が成城学校に在学中であったと、備考欄に書いてある。しかし、前述した成城学校の留学生卒業者リストにはその2人の名前が見当たらないので、中退したのかもしれない。

3.3.2 兄弟同学

上記の卒業生名簿には同じ苗字で同じ出身の兄弟らしき名前をよく見かける。たとえば、大正十年三月卒の唐志鋏、唐志銳は同じ湖南宝慶の出身で、大正十四年修業の熊涓、熊濱は同じ江西安義の出身である。昭和十一年の在學生の中にも、范之清、范之廉はともに四川渠の出身で、凌崇仁、凌崇義も同じ浙江呉興の出身である。しかも、凌崇仁、凌崇義はともに昭和十年度から学費の補助を受け、凌崇義はさらに昭和十五年から明治大学政経学部一年に入学し、昭和十五年九月から昭和十六年三月にかけて月額55円の補助までも受けている(H-0376, 0138)。その優遇を受けた理由が彼の父によるものであることを下記の文書が示している。

右凌崇義ノ實父凌啓鴻ハ支那事変前ニ於テ我邦ノ為ニ尽セシ功績不尠
ノミナラス現在モ武漢臨時政府ニ就職シ日支親善ニ努力シ居ルニモ鑑
ミ同人ニ対シ別紙記載ノ項留学生給与ノ目ヨリ支出シ日華学会ヲ經由
交付スルコトト致度

右仰高裁

その父を『日本留学支那要人録』(興亜院政務部, 昭和17年3月)で調べると、

凌啓鴻 浙江省呉興。1893年生。東京帝国大学にありて法律学を研究、更に米国に留学、スタンホード大学並びに華盛頓大学を卒業せり。帰国して内務部秘書、江蘇高等法院第二分院兼上海第一特区地方法院々長、上海市社会局局长、湖北高等法院々長兼漢口地方法院々長等に歴任。民国27年武漢市特別市政府臨時司法部長たり。⁵⁾

とある。なるほど、親日の汪兆銘政権下で高官を務め、「支那事変前ニ於テ我邦ノ為ニ尽セシ功績不尠ノミナラス」とは1921年米国行きの際、ワシントン会議で日本のためのロビー活動を行っていたことを指すのであろう⁶⁾。

なお、娘の凌崇徳も東京女子大学に入ったようで、もう一人の息子凌崇仁は1944年上海の聖約翰大学を卒業したようである⁷⁾。

3.3.3 女子学生

周一川『中国人女性の日本留学生史研究』(国書刊行会, 2000)によれば、女子留学生の受け入れは早くも1900年前後に始まったが、成城学校の性格上、女子の受け入れはもっとも遅かった。卒業名簿で確認すると、昭和十年(1935)修業の鞠英華(濱江哈爾賓出身、日本女子大学へ進学)と、昭和十一年(1936)在学の5人しかいなかった⁸⁾。前者は1938年日本女子大学を卒業したようであるが⁹⁾、後者の5人の行方については分からない。翌年

5) 一説では字楫民(1896-?)。留学を経て北平大学法学院教授、南京維新政府高等法院院長、1941年汪兆銘政権下で立法院立法委員などを歴任。

6) 松村正義「ワシントン会議と日本の広報外交」『外務省調査月報』2002, No. 1

7) 『聖約翰大学史』(上海人民出版社, 2007)によると、「1944 凌崇仁 文学士(政治)」と卒業者名簿に名前が確認できる。

8) 陳美容(四川)、龍從礼(湖南)、陳素琴(河北)、金昂釗(奉天)、趙維濱(四川)の5人。

9) 大門泰子「調査報告 旧制時代における本学への留学生附日本女子大学校留学生名簿」『成瀬記念館』2012 No. 27によれば、「鞠英華 1934 入学 18 歳

の盧溝橋事件で全員帰国してしまったのかもしれない。

4. 第五期 (1938-1945) 終焉をむかえる

4.1 校舎宿舎をすべて売却

留学生たちが全員帰国してしまった結果、翌昭和十三年一月から七月まではとりあえず、この立派な校舎と宿舎を陸軍第二病院に貸すこととなった。昭和十四年 (1939) 十月五日「成城学校留学生部建物処分ニ関スル件ノ申請」(H-0748, 0270) では、

昭和十二年七月支那事変後ハ留学生ハ挙ケテ帰国スルニ至リ今後当分学生再渡来ノ見込ミ相立チ難ク万止ムヲ得ス昭和十二年九月以降教職員ノ整理縮小ヲ試ミ遂ニ監督官庁の認可ヲ受ケテ休校トシ今日ニ及ビ申候

とし、「昭和十三年初頭ニハ時局ニ鑑ミ其ノ建物ヲ陸軍臨時病院トシテ貸上候處」とある。その後も、ずっと留学生の募集がなく、半年後にはついに校舎宿舎をすべて財団法人日本労働科学研究所へ売却してしまう結末となった。

最後の「譲渡建物」(H-0748, 0272) には、

一、財産目録所載

名称	構造	坪数	価格	建築年月日
校舎	鉄筋コンクリート階建及木造建	798 ^坪 .22	175,518 ^円 .94	昭和五年九月
寄宿舍	同	723.26	168,664.93	昭和四年二月
計		1521.48	344,185.89	

一、右売却価格（昭和十三年十二月再評価々格）293,989^円.89

尚附属備品類ハ其ノ一部ハ相当価格ヲ以テ売却ノ見込

（売買契約書昭和十四年十一月二十九日 (H-0748, 0275)）

家政学部第三類 1938 卒業 満州国吉林省 北滿特區女子第一中学校修了」とあり、日本女子大学を卒業したことがわかる。

「追テ留学生部ニ関スル事項ハ今後牛込区原町三丁目成城中学校構内ニ於テ取扱可致申添候」

と記されたように、昭和十四年十一月二十九日付けでこの建物を手放すことになった。そして留学生部は完全に「牛込区原町三丁目成城中学校構内」を撤収してしまった。むろん、それに際して、売却金の管理について外務省から、今後の留学生専用とするように厳しく注意されていた。たとえば、外務大臣野村吉三郎の私立成城学校宛ての指令所(第78号、H-0748、0268)第三条は、

前条ノ売却金ハ売却シタル月ヨリ五ヶ年以内ニ支那留学生養成ノ為使用セサルニ於テハ既ニ補給シタル金額ノ全部又ハ一部ヲ返納セシムとあった。そういう制約があったからこそ、次節に見る再起の動きがあっただろう。

なお、日本労働科学研究所側の説明では、昭和十四年(1939)十二月に藤山愛一郎(元外務大臣)の尽力により東京市世田谷区祖師谷2丁目に移転、1971年に東京都世田谷区から神奈川県川崎市へ移るとなっている。

結局、成城学園の隣にあった、あの「鉄筋コンクリート永久的の設備」たる校舎もその移転に伴って、他人の手に渡され、いまのマンション「成城ハイム」に建て替えられたのは1981年のことであった。

4.2 再起の試みもむなしく

昭和十三年から十六年(1938. 2. 1~1941. 3)三月まで三年にわたる休校を経て、留学生部が同年五月から市内の原町校舎で学校再開を試みようとする動きがあった。

その動きの背景として、昭和十五年(1940)三月に親日的な汪精衛政権が南京に樹立したことで、大陸の情勢がやや安定してきたことが挙げられる。昭和十六年(1941)四月の「成城学校留学生部沿革」には、場所はすでに牛込区原町三丁目八七になっているが、下記のように「成城学校留学

生部再開趣旨」を冒頭に出している。

成城学校留学生部ハ……明治卅一年成城学校内ニ特ニ留学生部ヲ設置シテ中国青年子弟ノ訓育ニ従事セルニ淵源ス。

爾來星霜爰ニ四十餘年……業績大ニ顕ハレ一時隆昌ヲ見ルニ至リシガ、不幸近年ニ至リ世界ヲ風靡セル險悪ナル思潮ハ滔々トシテ亜細亞ヲ席捲シ、我が朝野ノ努力ニモ拘ハラズ日支間相背馳シ、遂ニ本回事変勃発ヲ見ルニ至リ、留学生部モ一時休学ノ已ムナキニ至リシハ、誠ニ遺憾措ク能ハザル所ナリ。

然ルニ今ヤ彼我有識者ノ間ニ於テ断乎トシテ和平解決ヲ図リ、相共ニ東亜建設ニ邁進セントスル氣運、漸ク濃厚トナリ来レルハ真ニ慶幸トスル所ナリ。此ニ於テ成城学校ハ再ビ留学生部ヲ開学シー意本来ノ目的貫徹ニ邁進シ、固ク日支ノ文化提携ヲ図リ、以テ東亜ノ興隆ト永遠ノ平和ニ貢献センコトヲ期ス。敢テ中華民國青年子弟ノ来学ヲ望ム。

そして「昭和十六年四月以降其準備ニ着手、五月一日ヲ以テ開校ス」とあるが¹⁰⁾、残念ながらその実際の授業再開に関して、具体的な再開期間と学生数などについての資料が欠如しているようで、アジア歴史資料センターにも公表されていない。公的資料が少ないのは、あるいは戦後 G.H.Q による捜査で関係資料が没収されたことと関係しているのかもしれないし、もう一方、この時期の留学生は中国ではいわゆる「漢奸」というレッテルが張られがちなので、多くの人名などを逆に伏せるほうがよいと判断した上での措置かもしれない。

それでも再起を図ろうと、新たな学校——成城興亜中学の創設に賭けていた時期もあったようである。昭和二十年(1945)に「日華協会設立ニ伴イ解散統合セラルベキ団体」として成城学校留学生部も対象となっているため、その「昭和十九年度成城学校留学生部事業報告」(H-0269, 0266)

10) 『成城学校百年』による。

によれば、

昨年度來当留学生部ニ於テ企画中ノ仮称成城興亜中学ハ中華民國年少子弟ヲ招致入学セシムル目的ノ下ニ立案セラレタルモノニシテ、本十九年度モ左記設立準備委員ハ引続キ設立ニ関スル諸準備ヲ進メツ、アリシ処、大東亜省ニ於テ対支留学生補導機関ヲ統合シ新タニ強力ナル補導機関結成ノ準備ヲ進メツ、アリシヲ以テ、当留学生部モ欣然之ニ参加スルコト、ナリ、從來企画中ノ中学校ハ新機構内ノ中等部トシテ更生スベキ了解ヲ得テ大東亜省補導室ノ御指導下ニ鋭意調査、研究ヲ為シツ、アリタルガ、本年三月日華協会ノ誕生ヲ見ルニ至リ、別紙理事決議ノ通り、四月一日ヨリ当留学生部ノ全機関ヲ日華協会ニ委譲スルニ決セリ。

記

成城興亜中学設立準備委員

児玉秀雄，鈴木孝雄，坂西利八郎，岡碩人，新井本治，光永孝介，
宮川朝恵

とあるように、「成城興亜中学設立準備委員」として名を連ねているのは同じく財団法人中華留学生部の理事の面々であった。だが、その努力はむなしく、結局下記の決議に行き着くことになる。

決議

左記理由ニ依リ私立成城学校留学生部ヲ財団法人日華協会ノ経営ニ委譲スルニ決ス

理由

成城学校留学生部ハ本邦最初ノ支那留学生教育機関トシテ明治参拾壹年以來四十有餘年間其教育ニ従事シ日華兩國ノ文化推進国交親善ニ寄与シ來レルカ本回財団法人日華協会ニ於テ留学生教育ヲ統合スルヲ契機トシテ同協会ノ経営ニ委譲スルニ決ス

右決議ス

昭和貳拾年參月拾五日

私立成城学校留学生部

理事 児玉秀雄 同 鈴木孝雄

以上¹¹⁾

これをもって名目上 49 年間の成城学校留学生教育を閉じることになった。日華学院のもとで前東亜学校高等科よりなる高等部、成城学校留学生部を改造した中等部、前東亜学校正科からなる専修部の三つに再編されたのである。

5. 今後の課題

5.1 卒業名簿についての困惑

成城学校で教育を受けたことのある留学生の累積人数は「ソノ数五千名ニ達シ、卒業生一千五百餘名ニ上り候」(H0415, 0153) とある。その両者の学生数のずれによってさまざまな問題が引き起こされている。

上記のように、昭和十一年二月二十日に発行した成城学校留学生部編集の『留学生部出身者名簿』には最後の年度の在生学生を含めて 1,564 名となっているが、そこには、卒業していないかつての在学者を反映させていないため、中国では成城学校卒と言われている人の多くは実際には確認のしようがない。いわゆる中退者を把握するにしても在学者全体のリストアップをする必要が出てくると思われる。たとえば、『成城学校百年』にも触れていた陶成章や、中国共産党の初代書記長の陳独秀(1879-1942)もむろん卒業者名簿にはなく、在籍の資料をもって補完すれば、留学生の実態をより詳しく検証することができようかと考えられる。その方法としてすでに公表されていた日華学会の 1927 年より毎年発行した中国人留学生名簿

11) 同書類の最後の成城学校留学生部の便箋に、「留学生部財産処分ノ件」として「留学生部残余財産中有価証券約金六万円也ノ外、校具備品理化機械図書等ヲ日華協会ニ委譲ノ予定ニテ目下整理中ナリ」と記されていた。(H-0269, 0269)

及び各学校留学生数に基づき、その年の在学者を把握し、そして卒業時の人数との差を算出することができるだろうが、やはり在学者に関する記録などの発掘が必要となるであろう。

5.2 成城学園との関係

冒頭に記したとおり、大正十五年(1926)には旧制7年制の成城高等学校が創られ、第二中学校はその尋常科(4年制)に組み込まれた。翌昭和二年(1927)には5年制の成城高等女学校を開設し、総合学園としての形が整う。

成城学園の隣には昭和五年から昭和十二年までの八年間に若い留学生たちが大勢集まりながら、両者の間に交流が少ないのは不思議である。この八年間の『成城学園時報』を調べても、関係記事として、第56号(昭和9年9月18日)「満州国足球队」本校を訪問—歓迎試合挙行さる」という記事のほか、第65号(昭和10年5月)に「日支親善の聲がやかましい折柄去る五月一日中華民国福建省教育視察団十二名団長陳中英氏引率の下に來校、教育方針、教授法等に関して先生方と懇談の後、各教室で授業の實際を參觀をして引上げた。」という記事があったのみである。ただ、第76号(昭和11年3月20日)に「志願者お国調べ」として「お膝元の次に何と関東州朝鮮続く」というタイトルで、「それに海外からは満州のハルビン児に中華民国青島生まれも馳せ参じて居る」というその年の応募状況を伝える記事があった。

実際に日華学会の「昭和十二年六月現在 第十一版中華民国満州国 留日学生名簿」には下記の2名の留学生の名前が記載されている(H-0202, 0362)。

蔡啓恒	20	吉林	新京	文化乙三年	台北一中	官費
連 紘	19	同	同	同	大連一中	

つまり、成城高等学校にも満州の留学生が来ていることがわかる。それで

も隣の留学生部の学生との交渉の様相について考察する余地があらうかと思われる。

5.3 時代に翻弄された留学生

いままで見た通り、いわゆる官としての記録が多く、個人個人の記録は少ない感がある。また、成城学校自体に関しても日本人学生による視点も必要である。数年前から、高知から上京した若い学生岡内七郎の日記を整理しはじめているが、そこからは明治二十五年の成城学校への入試準備や試験の様子や入学後の生活などが見えてくる。

同様に、中国人留学生からの声が聞こえてこないのも一つの問題である。現に第一期の留学生呉玉章の回顧録で成城学校について触れた箇所があったくらいである。そのほか、留学生活についての調査が必要不可欠となるため、さらに中国関係の資料を発掘すべきであろう。たとえば、早稲田大学に留学した黄尊三の個人日記などのようなものがあれば、いわゆる教育を受ける側の視点がわかってくるだろう¹²⁾。

前述した通り、成城学校の中国人留学生史を通して眺めてみると、第一期や第二期への関心が高く、今でも研究の主要テーマになっている。しかし、第三期以降については逆に何も手を付けていない状態で、本稿で全体図をスケッチするだけでもさまざまな未知の問題が横たわっていることがわかる。今後の研究方向はこうした第三期以降に重点を置くべきだと思う。とりわけ声高に再開を宣言された1941年5月以降の状況（つまり第五期）を調査する必要がある。この時期に関して河路由佳(2001)の先行研究があり、1941年から1944年まで毎年千人を超える留学生が日本にやってくる事実が指摘されている。具体的に成城学校留学生部の入学者数などについて詳細な検証をする必要が出てくるであろう。時代に翻弄されたこの第

12) 『清国人日本留学日記』黄尊三著、さねとうけいしゅう・佐藤三郎訳、東方書店、1986年。

五期の留学生の状況をより調べてみたいと考えている。

【参考文献】

- 『成城学校創立五十周年記念』成城学校編，成城学校，1935年
実藤恵秀『増補版 中国人日本留学史』くろしお出版，1981年
呉玉章「辛亥革命：中国近代史における偉大な民主主義革命」外文出版社，1964年
黄福慶『清末留日学生』中央研究院近代史研究所專刊(34)，1975年
中村義「成城学校と中国人留学生」『中国近現代史論集—菊池貴晴先生追悼論集』辛亥革命研究会編，汲古書院，1985年
小林共明「振武学校と留日清国陸軍学生」同上
小島淑男「辛亥革命期中国留日学生の動向—武昌蜂起から中華民国成立まで」同上
成城学校『成城学校百年』校史編集委員会編，1985年
成城学校編集『成城』創立百周年記念号，1986年
倉沢愛子『南方特別留学生が見た戦時下の日本人』草思社，1997年
陳潮『近代留学生』上海古籍出版社，1998年
河路由佳「盧溝橋事件以後(一九三七～一九四五)の在日中国人留学生」『一橋論叢』126巻3号，2001年9月号
宮城由美子「成城学校と中国人留学生についての一考察」『佛教大学大学院紀要』(35)，佛教大学学術委員会大学院紀要編集委員会編，2007年
鈴木正弘「留日中国人学生の学んだ日本史教育の一端—振武学校・成城学校における日本史教育」『立正史学』(103)，立正大学史学会編，2008年
金明洙「旧陸軍士官予備校成城学校と19世紀末の韓国人留学生—「朝鮮の洪沢栄—」韓相龍を中心に」『三田学会雑誌』104(3)，2011年
孫安石「『日華学報』解題」『日中関係史資料叢書7日華学報』16巻，2012年
韓立冬「東亜学校の中国人留学生予備教育—特設予科との関係を中心に」『年報地域文化研究16』，2012年
大門泰子「調査報告 旧制時代における本学への留学生附日本女子大学校留学生名簿」『成瀬記念館』No. 27，2012
柴田幹夫「『日華学堂日誌』1898～1900年」新潟大学国際センター，2013年
見城悌治「留学生は近代日本で何を学んだのか」日本経済評論社，2018年
吉辰「清末湖北省の留日軍事教育—以張之洞督鄂時期為中心」『教育学報』，2019年第5期